

〈疎外された労働〉の概念(一)

細見英

第一部 〈疎外された労働〉の概念——諸研究の概観と課題の設定——

はじめに

- (一) 思想史的視角からの諸研究
 - (二) 方法的視角からの諸研究
 - (三) 経済学的視角からの諸研究
- 以下の研究の課題と視角

第二部 〈疎外された労働〉の概念——その形成史と経済学的意義——(次号以下)

第一部 〈疎外された労働〉の概念——諸研究の概観と課題の設定——

はじめに

真理とは全体である。むきだしの結果は傾動 Tendenz を背後にのこした死屍にすぎず、その生成過程といっ

しよになつてはじめて現実的な全体である。——これは、『精神現象学』の序文にみられることばである。⁽¹⁾このヘーゲルの提言は、対象がなにてあれ、その真理を把握するための原理的態度を指示した偉大な思想をふくむものといわねばならぬ。

マルクス主義の具体的な概念的把握——それなしには、いわゆるへマルクス主義の創造的發展へもありえない——を志すものにとつても、右のヘーゲルのことばは、基本的原理としての意味をもつ。『資本論』にかんする単に悟性的な吟味検討も、それはそれなりに意味のあることであるとはいへ、その主著に結晶するにいたるマルクスの、苦闘にみちた思想形成過程との統一において研究されなければ、真に具体的な、したがって現在の發展の契機を内にひそめたマルクス理解には、とうてい達しえないであろう。

この意味で、一九二〇—三〇年代に、リヤザノフ D. Rjazanov およびアドラツキイ V. Adoratskij の手によつて、初期マルクスの諸手稿——なかんづく、『ヘーゲル国法論批判』Kritik des Hegelschen Staatsrechts『経済学・哲学手稿』Ökonomisch-philosophische Manuskripte⁽²⁾、『ドイツ・イデオロギー』Die deutsche Ideologieなどが発見され公刊されたことは、マルクス主義理解にとつて巨大な意義をもつことであつた。これによつてマルクス主義の生成過程を具体的に把握する道がひらかれ、マルクス主義の内外から、若き時代のマルクスの諸労作にたいするつっこんだ研究がおこなわれてきた。そして現在では、へ初期マルクスの研究へとして内外の学界の重要な研究分野の一つを形成し、注目すべき研究成果をうみだしている。

(1) Vgl. Hegel: Phänomenologie des Geistes, hrsg. v. J. Hoffmeister, Vig. v. Felix Meiner, s. 11, s. 21. 金子武蔵氏訳、改訳『精神現象学』上巻、岩波書店、三頁、一四頁。

へ疎外された労働へ の概念 (一) (細見)

(2) 一九二七年以降、モスクワのマルクス・エンゲルス研究所 Marx-Engels-Institut の委託により、最初はリヤザノフを編者として、かれの失脚後はアドラツキイの手によって、Karl Marx/Friedrich Engels, Historisch-kritische Gesamtausgabe, Werke/Schriften/Briefe. (一般に MEGA と略称されている) が刊行せられた。『クーゲル国法論批判』はその erste Abtheilung, Band 1, erster Halbband, 1927. 及び『経済学・哲学手稿』は erste Abt., Bd. 3, 1932. 及び『ドイツイデオロギー』は erste Abt., Bd. 5, 1932. で、完全なかたちではそれぞれはじめて公表されたのである。これらの諸手稿は、現在刊行中の Marx/Engels, Werke, Dietz Verlag. に『経済学・哲学手稿』をふくむ別巻は未刊であるが）再録されてゐる。なお、MEGA, erste Abt., Bd. 3. の巻末に収録されているマルクスの研究ノート Ökonomische Studien は、『経済学・哲学手稿』執筆直前および同時期のマルクスの経済学研究のあとを示すものとして、本稿のテーマにとつてはものがすことのできない貴重な資料である。

ところで、右にあげた初期マルクスの主要手稿のうち、『ドイツ・イデオロギー』（一八四五―六年執筆）については、——その全体的な内容把握および後期のマルクスの思想・理論体系との関連などの点では、なお多くの解明さるべき問題をのこしてはいるもの——すくなくともマルクス主義形成過程における位置づけにかんするかぎりでは、そこにおいて唯物史観が定式化されその基礎が確立されたとみる点で、とにかくも一致した評価づけが与えられているといえよう。⁽¹⁾ところが、『経済学・哲学手稿』（一八四四年執筆）については、これをとり扱う研究者の立場、視角ならびに評価基準にしたがつて、さまざまに理解され定位されている現状にある。このことは、この『手稿』が断片的で未整理のままに残されたことにもよるであろうが、ヨリ基本的には、多様な問題点を内包するその内容自体に由来するものといわねばなるまい。

マルクスはこの『手稿』において、プロレタリアートの立場に立って、ヘーゲル―フオイエルバハを軸とする

ドイツ哲学ならびに近代の経済学を継承するとともに批判し、そして従来の（主としてフランスの）社会主義・共産主義にみずからの共産主義思想を対置している。したがってここに、いわゆる「マルクス主義の三源泉」にたいするマルクスの継承Ⅱ批判の最初の関係が具体的な姿で示されているのであるが、そのさいにマルクスが右の三者を批判し止揚するにあたって自己の積極的な原理としたものは、〈疎外された労働〉⁽²⁾ die entfremdete Arbeit の概念であった。この〈疎外された労働〉の概念こそが『経済学・哲学手稿』をつらぬく赤い糸であり、その中心内容であること——この点については内外の研究者のあいだにほぼ異論はない。問題は、この概念の内容をいかにとらえ、その意義をいかに評価するか、という点に横たわっている。この点についての見解が、各研究者の立場および視角によって異なり、それに応じてこの『手稿』がさまざまな位置づけを与えられているといえよう。これまでに見られる数多くの『手稿』研究のうち、とりわけ注目すべき独自の意義をもつとおもわれるものを取りあげて、それらのもつ視角を基準として区分すれば、ほぼつぎのような一応の類別をおこなうことも可能であろう。

(一) 思想的視角からの研究として、

- (1) レーウィット Karl Löwith、マルクーゼ Herbert Marcuse の流れをくむ諸研究、
 - (2) ルカーチ Georg Lukács、
 - (3) グロップ Rugard Otto Gropp、らの見解。
- (二) 『資本論』との方法的・体系的関連の究明を主眼とする

- (1) 清水正徳教授、

〈疎外された労働〉の概念(一) (細見)

(2) 梯明秀教授、らの研究。

(3) 『手稿』の経済学的意義・内容を追究する

(1) ローゼンベルク H. H. Rosenbergr

(2) ヤーン Wolfgang Jahn

(3) 遊部久蔵教授、らの研究。

以下、右にあげた諸研究の主要点を右の順序で素描し、若干の検討をくわえて、わたし自身の『経哲手稿』⁽³⁾の核心としての〈疎外された労働〉の概念——研究の課題と研究視角をあきらかにしようとおもう。

(1) この、『ドイツ・イデオロギー』にたいする評価の一致は、本文でも強調しているように、あくまで限定づきのものすぎない。それは、この論稿が従来、主としてその冒頭のフォイエルバハにかんする部分のみについて、しかも多分に外的にしか研究されていないがための、いわば表象的、理解の一致にすぎないといえるのではなからうか。この論稿を全体としてとりあげ、かつ前後の時期のマルクス思想との関連において内在的に把握する概念的、理解は、なお果さるべき課題として残されている。

(2) この〈疎外された労働〉の概念を原理的に展開したのが、『経済学・哲学手稿』のうち、第一手稿の最後の部分であることはあらためていうまでもない。

『経哲手稿』は、一八四四年四月頃から八月頃までの期間に、近代の経済学者たちおよびヘーゲルを批判して書かれた断片的な手稿を内容とするものであるが、アドラツキイはこれをつぎのように区分・編列して公刊している。

序文*

第一手稿——労賃*、資本利潤*、地代*、疎外された労働。

第二手稿——私的所有の關係。

第三手稿——私的所有と労働、私的所有と共産主義、欲望・生産および分業、貨幣、ヘーゲルの弁証法と哲学一般の批判。
右の*印以外の項目は、アドラツキイによって名づけられたものである。また、第三手稿の最後の「ヘーゲルの弁証法と哲学一般の批判」は、もともと第三手稿のなかの三カ所に分散していたヘーゲル批判の叙述を、アドラツキイが一括して最後に記したものである。

(3) ここにあげた類別とそれにもとづく以下の考察は、とりわけ、フランスにおいて活発におこなわれている主として思想的視角からの『手稿』研究を直接にとりあげていない点で、不十分なものである。とはいえ、わたしがここで思想的視角からの研究としてあげた三つの典型は、『手稿』を中心とする初期マルクス解釈のみならず、一般に、こんにち世界的にみられるマルクス主義把握の三つの主要な潮流を表示しているものといえる。この意味で、フランスにおける『手稿』研究の大部分も、おおまかな傾向としてみれば、ここに思想的視角からの研究の(1)、(2)、(3)としてあげたもののいずれかに、ほぼ包摂できるのではないかとわたしは考えている。いずれにせよ、ここでの類別およびそれにもとづく以下の考察は、従来の各国の『手稿』研究を網羅した全面的な概観を企図しておるものではなく、わたし自身が〈疎外された労働〉の概念を研究するにあたっての課題と視角をあきらかにしようとする視点からおこなっているものであることを、念のためにことわっておく。

(一) 思想的視角からの諸研究

1

現在のマルクス主義研究のなかでひとつの有力な流れをなしているものは、マルクス本来の思想を「人間解放

の理論」としての「現実的ヒューマニズム」der reale Humanismus にもとめ、この「本来のマルクス主義」は初期のマルクス、とりわけ『経済学・哲学手稿』において確立している、とみる立場である。このような見地からすれば、『資本論』によって代表される後期のマルクスは、初期に確立した基本思想を経験科学としての経済学の領域に応用したにすぎず、そこにはなんら本質的な思想発展は認められないことになる。

このようなマルクス主義把握は、レーヴィットの「マックス・ウエーバーとカール・マルクス」⁽¹⁾によって先鞭をつけられたものであった。『経哲手稿』の公刊以前に執筆されたとおもわれるこの論文でレーヴィットは、マルクスの生涯をつらぬく基本的なテーマは、一八四一年から四五年にいたる諸労作で確立された「自己疎外」の思想を手引とするところのブルジョア世界一般の批判であり、初期マルクスのこの思想「現実的ヒューマニズム」⁽²⁾が、「その後のかの『資本論』にたいしてもいぜんとして基礎をなしている」という見解を公けにした。この見解が、いわゆる正統派的なマルクス主義——これをレーヴィットは、「粗雑にされたばかりか不具にされた形におけるマルクス主義」⁽⁴⁾とよんでいる——の批判という意味をもっていたことは、あらためていうまでもない。『経哲手稿』が公刊されるや、ただちにこれを重視してマルクーゼが提起した主張⁽³⁾——従来のマルクス主義解釈はこの『手稿』を基礎にして再検討されるべきだ、という主張——も、若干の視角の差異はあっても、問題意識においては右のレーヴィットの見解と軌を一にするものであったといえよう。

(1) K. Löwith: Max Weber und Karl Marx. in *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 67, 1932. 柴田・

聡・安藤氏訳「ウエーバーとマルクス」弘文堂。

(2) この論文が発表されたのは、経哲手稿」の公刊とおなじ一九三二年であるが、ここでは「手稿」への言及はまったくな

い。レーヴィットが初期マルクスの労作として問題にしているのは、主として、『ライン新聞』の諸論文、『ヘーゲル国法論批判』、『独仏年誌』の二論文、「フョイエルバハにかんするテーゼ」、『ドイツ・イデオロギー』である。だが『手稿』の公刊によってレーヴィットは、自己の主張を変更する必要があるところか、むしろそれを根拠づける決定的な確証をそのうちに見出したようである。この点は、『ウェーバーとマルクス』での主張を、『手稿』を使っていっそう広い視点から論述したかれの労作『Von Hegel zu Nietzsche, 1941 u. 1949. (柴田治三郎氏訳『ヘーゲルからニーチェへ』I、II、岩波現代叢書)をみてもあきらかであろう。

(3) レーヴィット、前掲訳書、とりわけ七二頁参照。

(4) 同右、七一頁。傍点はレーヴィット。

(5) Vgl. H. Marcuse: Neue Quellen zur Grundlegung des historischen Materialismus. Interpretation der neueröffneten Manuskripte von Marx, in *Die Gesellschaft. Internationale Revue für Sozialismus und Politik*, hrsg. v. R. Hilteding, IX. Jg. (1932) 2. Halbband. なお、主題に関連するその後のマルクラーゼの著作として、Reason and Revolution. Hegel and the Rise of Social Theory, 1941. があつた。

このレーヴィット—マルクラーゼの問題提起は、正統派マルクス主義の陣営からは「マルクス主義の歪曲を意図するもの」としてうとんぜられ、むしろ批判の対象とされてきたが、きわめて少数のマルクス主義哲学者および、とりわけ、非マルクス主義の立場にたつ哲学者によって注目され、この視点から『手稿』研究とそれにもとづくマルクス主義解釈の再構成がこころみられてきた。そして現在、マルクス主義の本質——それに肯定的な態度をとるか否定的な態度をとるかという点では差異があるもの——を『経哲手稿』の〈疎外とその止揚〉の思想のなかにみるという点、したがってまた、従来および現在の正統派的マルクス主義との対決を意図する点では共通

する諸研究が、西ドイツ、フランスをはじめアメリカやわが国でもあらわれている。⁽¹⁾

(1) とりわけ西ドイツでは、一九五二年以降、各大学研究者による研究団体 Die Studiengemeinschaft der Evangelischen Akademien——現在は Die Evangelische Studiengemeinschaft と改称——が結成され、その一部会では *Marxismus-kommission* において、メツケ Erwin Metzke (一九五六年死亡)、フェッチャー Iring Fetscher、ティエール Erich Thier を中心に、組織的なマルクス主義研究がおこなわれてきた。その成果は『マルクス主義研究』*Marxismusstudien* という名の論文集にまとめられ、第三集まで刊行されている(第一集——一九五四年、第二集——一九五七年、第三集——一九六〇年)。この研究団体に参加しているひとひとの立場は、実存主義哲学者、キリスト教神学者、純正(?)マルクス主義哲学者、などさまざまであり、正統派マルクス主義批判の点では共通しているものの、かならずしもマルクス主義そのものを否認する意図で統一されているものではない(たとえば、中心的メンバーの一人フェッチャーは、マルクス主義の「純正弁証法的把握」*genuin-dialektische Auffassung* を強調する論者である)。いずれにせよ、*Marxismuskommission* に属する多くの研究者が「経哲手稿」におけるマルクスの思想に焦点をおいていることはたしかなようであるが、とりわけ以下の諸論文は、この主題に直接関連する論点をふくんでいる。

Ludwig Landgrebe: Hegel und Marx, in 1. Folge.

E. Thier: Etappen der Marxinterpretation, in 1. Folge.

E. Metzke: Mensch und Geschichte in ursprünglichen Ansatz des Marx'schen Denkens, in 2. Folge.

I. Fetscher: Von der Philosophie des Proletariats zur proletarischen Weltanschauung, in 2. Folge.

Derselbe: Das Verhältnis des Marxismus zu Hegel, in 3. Folge.

このほか、ドイツ語の文献としては、

E. Thier: Das Menschenbild des jungen Marx, 1957.

Siegfried Landshut: Einleitung in „Karl Marx, die Frühschriften“, hrsg. von ihm, 1953.

Heinrich Popitz: Der entfremdete Mensch. Zeitkritik und Geschichtsphilosophie des jungen Marx, 1953.

フランスでも実存主義者やキリスト教神学者による初期マルクス研究書は多いようだが、わたしはよく知らない。とりあえず、主要文献の指摘をふくむべきの論文をあげておく。

I. Fetscher: Der Marxismus im Spiegel der französischen Philosophie, in *Marxismusstudien*, I. Folge.

『経哲手稿』研究をふくむ最近のアメリカの書物として、¹⁾ ²⁾ は注目に値する。

Raya Dunayevskaya: Marxism and Freedom……from 1776 until Today, with a Preface by H. Marcuse, 1958.

Eritz Pappenheim: The Alienation of Modern Man. An Interpretation based on Marx and Tönnies, 1959. (粟田

賢三氏訳『近代人の疎外』岩波新書。)

マルクス主義の本質を『経哲手稿』のなかにみる立場、という一点にしばってみれば、³⁾ べきの邦語文献をもここにあげておくべきであろう。

淡野安太郎氏『初期のマルクス』勁草書房、の巻末の論文「初期マルクスの人間観」。

鈴木亨氏『実存と労働』ミネルヴァ書房。

右の注にあげた諸文献は、すでにのべたように、それらの著者の思想的立場の差異にもかかわらず、『経哲手稿』の〈疎外とその止揚〉の思想のなかに「本来のマルクス主義」をみいだす点で共通しているのであるが、とすれば、かれらはマルクスのこの思想を、いったいどのように把握しているのであろうか。

特徴的なことは、これらの論者たちがいずれも、『手稿』におけるマルクスの〈疎外〉の思想をば、類、本、質、Gattungswesen としての、人間からの疎外の規定に集約してとらえていることである。すなわち、かれ

らによれば、マルクスはフォイエルバハの感性的人間観をうけいれて、感性的・对象的な人間こそが現実的な人間であるとする立場から出発したのであるが、しかし、現存する人間をそのまま、フォイエルバハのように、肯定的に直観したのではない。むしろ、現存する人間の定有はその普遍的本質⇨類的本質⇨から疎外された存在、それゆえたんなる実存の規定におちいつている、とマルクスは把握したのである。したがって、ここにマルクスが構想している「類的本質」としての人間は、ヘーゲルの労働観——自己実現・自己確証行為としての「労働」⇨把握——とフォイエルバハの感性的人間観とを結合したところに成立した、普遍的・全体的人間であり、これは、いま考察の対象としている論者たちによれば、まさにヘーゲルの主体即実体としての「絶対精神」⇨「理念」の論理構造を継承するものにはかならない。そして、絶対精神の自己実現の必然的モメントとしてのヘーゲルの「外」の論理が、「理念」としての「人間」に適用されたところに、「人間の自己疎外とその止揚」⇨「人間の自己解放」⇨「自己実現」というマルクスの根本思想が成立した、とみられるわけである。このように、『手稿』の基調をなす思想が、「理念」としての「人間」の学⇨マルクスの「人間学」Anthropologieの確立と、これにもとづく「人間の自己解放」の主張⇨「現実的ヒューマニズム」にみいだされ、これこそがマルクス主義の本来的内容である、と把握されているのである。したがってこの潮流に属する研究者たちが、いずれもヘーゲルとマルクスの継承関係に研究の重点をおき、またマルクスの『手稿』をとりあげるばあいにも、「疎外された労働」の項を最後の「ヘーゲルの弁証法と哲学一般の批判」の項と不可分に結合させて考察しているのも、しごく当然のことといえるであらう。

マルクス主義解釈の再構成を企図する研究者たちのマルクス「疎外論」の把握は、以上の点ではほぼ共通して

いるとみてさしつかえないであろう。だが、このように理解された「本来のマルクス主義」をいかに評価するかという点では、各研究者の立場に応じて見解が分かれているようである。そのひとつは、このように解釈されたマルクス思想を肯定して、これをテコに正統派マルクス主義およびその体制としての現存社会主義国家を攻撃するものである (u. a. Fetser, Dunajevskaya)。この立場のひとつによれば、ソヴェト連邦は「ドレイ化の理論と実践としての共産主義」にもとづく「全体主義国家」(Dunajevskaya)、「非人間的・非自由な支配体制」、「右翼ヘーゲル主義者流の観念にもとづく国家」(Fetser)である。それはまさに、人間の自由と普遍性の実現を主眼とする「本来のマルクス主義」の反対物にはかならない。

もうひとつの立場は、正統派マルクス主義を否認することはもちろん、さきにもたように解釈された「本来のマルクス主義」そのものを否定するひとつである (u. a. Hier, Popitz)。この立場の論者によれば、『手稿』のマルクスは、孤立して〈不安〉にみちた人間の実存 \parallel 疎外的実存を確認したのであった。ところがマルクスは、ヘーゲルの〈労働〉観と思弁的方法をそのまま受けついで、人間の疎外的実存のあなたに〈理念〉としての普遍的人間存在 \parallel 〈類的本質〉を構想し、現実的ヒューマニズムを主張したのである。このような現実的ヒューマニズムの構想は、しかしながら、ヘーゲル哲学と同様に、「信念」Überzeugung「信仰」Glaubenを背後にひそめたまったく思弁的な構成にはかならない。この思弁的構成をマルクスからすてざれば、あとになにがこるか。人間存在への不安感、疎外的実存の直観だけである。——主として実存主義の立場から『手稿』を研究するひとつとは、この点にのみマルクスの積極的な意味をみとめ、キルケゴールとならぶ「実存的ヘーゲル批判家」der existentielle Hegel-Kritiker としての地位をマルクスにあたえるのである。

右のような諸傾向の実践的意義については、きわめて問題のあるところであろう。が、そのいずれもが、さきにもとめている以上に、これらの傾向のもつ問題性を根本的に解明するカギは、マルクス〈疎外論〉にたいするこれらの解釈の正当性いかんを問うところにあるはずである。

この意味で検討されるべき核心的な問題は、わたしの考えでは、すでにみたようにかれらが、『手稿』におけるマルクス思想の基調をば、〈人間の自己疎外〉とその止揚に集約して把握していることである。これははたして正しいものといえるであろうか？『手稿』におけるマルクスの問題意識の基調がその点にあったことはたしかである。しかし、ここではマルクスは、もはやこの問題を意識するだけにとどまってははいないのではなからうか。かれは、『手稿』のうち第一手稿の最後の部分で、〈疎外された労働〉をば四つの規定——(一)生産物からの労働者の疎外、(二)自然からの人間の疎外、(三)労働からの労働者の疎外、(四)人間の自己疎外、(五)人間からの人間の疎外——からなる「概念」として展開している。このことは、マルクスが〈人間の自己疎外〉という一般の問題意識を深めることによって〈疎外された労働〉の概念規定に到達したこと、そして前者は後者のうちに包摂されることよってヨリ具体的な規定づけを獲得するにいたっていることを意味するものではなからうか。とすれば、『手稿』におけるマルクスはそれ以前の段階にくらべて、本質的な前進を示しているものとみななければなるまい。この前進を可能ならしめたものこそ、経済学の研究である。近代資本制社会の構造を科学的に認識することを課題とした近代の経済学、すなわちスミスやリカードの学説の批判的な研究を媒介としてはじめて、マルクスは〈疎外された労働〉の概念を確定しえたのだということは、『手稿』を外的にみるだけでもあ

さらかである。したがって、『手稿』の〈疎外された労働〉の概念は、元来、ヘーゲル—フォイエルバハを批判的に継承した哲学と、近代の経済学を媒介とする科学との両契機を統一した内容と論理構造をもつものであったはずである。ところが〈人間の自己疎外とその止揚〉一般にマルクスの基本思想を解消する論者たちは、近代の経済学とマルクスとの本質的な関係を無視ないしは軽視する傾向にあり、したがってまた、『手稿』における疎外論の科学的契機を没却しているものといえるのではなからうか。まさにこの点に、かれらがマルクス主義を「現実的ヒューマニズム」一般に解消し、また、『資本論』の意義を軽視したり否定することの基本的根拠が存在するように思われるのである。

右に指摘した『手稿』解釈の一面性は、いま問題にしている論者の多くが、〈人間の自己疎外〉の實在的根拠を不問にふしていることにもあらわれている。たとえばそれが問われたとしても、人間を疎外せしめる根源が「商品生産」一般にもとめられ、したがって、『手稿』の疎外論の『資本論』にたいする関係は、『資本論』第一章「商品論」の「商品の物神崇拜的性格」に認められるにとどまっている。⁽¹⁾このことは、これらの論者が〈人間の自己疎外とその止揚〉というばあいに表象している〈人間〉が、実は原子論的な近代的個人であることを意味しているとはいえないだろうか。このような人間把握にとどまるかぎりにおいて、哲学と科学、人間把握と社会把握との統一としてあるはずのマルクスの思想—理論体系が、人間の学としての〈アントロポロジー〉と、社会の問題を対象とする〈ソツィオロジー〉とに分裂させられることになっているのではなからうか。

(1) たとえば、Löwith: Max Weber und Karl Marx. 前掲訳書、とりわけ九〇頁以下、Pappenheim: The Alienation of Modern Man. p. 84 頁、前掲訳書一〇〇頁以下を参照せよ。

なお、ハッペンハイムのこの著書は、わたしの主題と関連する興味深い内容をふくんでいる。この本の狙いは、著者によれば、「「こんにち多くのひとが関心をしめし」、「合ふことば」 catchword とさえなっている人間の「疎外」という事態——現代社会のあらゆる領域で認められる現象——が、それぞれ偶然的なものではなくて、「同一の根源」——現代の社会構造——に由来するものであることをあきらかにする点にある」(ibid., p. 14-16. 訳書五—八頁)。この目的で著者は、「資本主義時代を自己疎外の概念を軸として解釈」することによって、「疎外」ということばを「社会学的理論に合体させた」マルクス (ibid., p. 14. 訳書五頁) の『経済学・哲学手稿』およびこれにさきだつて『経済学研究ノート』(とくに J・ミルへの評注) にたちかえり、ここで「人間の疎外」と現代社会の「土台」としての「商品生産」との関係が原理的に解明されていることを強調してゐる (ibid., p. 81 ff. 訳書九六頁以下)。

「マルクスの思想に共鳴しないひとびとのあいだでさへ合ふことばになつて……〈疎外〉」(ibid., p. 14. 訳書五頁) ということの本来の意義を、マルクスにさかのぼってあきらかにしようとする著者の意図は、高く評価されてよい。だが同時に、かれのこころみの限界をも見さだめておくことが必要である。すなわち、かれがマルクスの基本的概念としてくりかえしのべているのは「人間の疎外」であり、そしてその決定的根源は「商品生産」にもとめられているのである。もつともハッペンハイムは、商品生産にもとづく人間の疎外からすすんで、労働力の商品化、商品生産者（雇傭者）と労働者との分離にも言及してはいる。しかしこの分離が、商品生産を根柢とする人間の疎外一般のたんなる一局面と把握されるにとどまつているために、現代社会において階級対立のもつ意味がぼかされているのである。資本制社会における人間の疎外の具体化された現実的な形態は、むしろ資本—賃労働関係にあるのであり、この意味で、これこそが現代におけるあらゆる疎外現象の基本的根柢をなしているとみるべきではなからうか。

わがくにでも「疎外」ということばがはやりつつあるが、それが「人間の疎外」一般としてとらえられているかぎりでは、その〈止揚〉のための現実的な道はとぎざれているといわねばならない。マルクスの意味での「疎外された労働」の概念に

まで深められたときにはじめて、「人間の疎外」が生産関係の学としての経済学にむすびつき、その現実的構造と、止揚のための現実的な契機があきらかにされるのではないだろうか。

レーヴィットやマルクラーゼの流れをくむ論者たちの問題意識と諸研究は、客観主義⇨実証的科学主義に傾斜しつつあったいわゆる正統派マルクス主義にたいして、マルクス主義の哲学的契機および主体性の問題を提起したという意味を、一面ではもつものではあつたであろう。だが、かれら自身が与えた解答は、むしろ、本来のマルクスの外から、マルクスに反しておこなわれたものであるといわねばなるまい。これにたいして、かれらと問題意識と視角を同じくしながらも、マルクスに内在于して『手稿』およびマルクス主義一般の把握をこころみている研究として、われわれはルカーチの業績に注目しなければならない。

2

つぎにルカーチの⁽¹⁾所論を考察しよう。

(1) 『手稿』を直接の対象としたルカーチの研究には、『Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx (1840-1844), in *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 2/2, Jg. 1954. (平井俊彦氏訳『若きマルクス』ミネルヴァ書房)がある。これは一八四一年の「学位論文——デモクリトスとエピクロスとの自然哲学の差異」から『経済学・哲学手稿』にいたるマルクスの思想的発展を、本文にもとづいて、ヘーゲル弁証法の唯物論的転倒⇨唯物弁証法の確立過程としてとらえてあとづけた好論文である。

〈疎外された労働〉の概念(一)(細見)

さらにルカーチの大著 *Der junge Hegel und die Probleme der kapitalistischen Gesellschaft*, 1954.（一九四八年の第一版では、表題が *Der junge Hegel—Über die Beziehungen von Dialektik und Ökonomie*. となつてゐる）は、直接に『手稿』を対象とした研究ではないが、しかしここでルカーチがベルン時代から『精神現象学』にいたるヘーゲルの思想発展をとり扱うばあい、その研究視角は、マルクスの〈疎外された労働〉の思想（＝確立された唯物弁証法）の先駆としてのヘーゲル弁証法の生成を解明することにあるのであり、したがってルカーチのヘーゲル研究の背後には、またその基礎には、つねに『手稿』の〈疎外された労働〉の思想内容、およびそれとヘーゲルとの関連という問題が潜められているわけである。このためにこそこの名著が、初期マルクスおよびマルクス一般の理解にたいしても、画期的な意義と反響をもちえたのであった。（出口勇蔵氏編『経済学と弁証法——ルカーチのヘーゲル研究』ミネルヴァ書房、は、この書物のダイジェスト版としてすぐれたものである。）

ルカーチのもうひとつの大著、*Die Zerstörung der Vernunft. Der Weg des Irrationalismus von Schelling zu Hitler*, 1955.（暉峻・飯島阿氏訳『理性の破壊』上・下、河出書房世界大思想全集）は、『手稿』と直接の関連はもたないが、これは、『精神現象学』——『手稿』を軸とする弁証法的思惟——合理主義に対抗して発展してきた近代非合理主義の流れを批判的に研究したもので、かれの近代思想史把握の一方の面の具体的研究である。それゆゑルカーチの『手稿』評価の基本的な構えを理解するためには、この著作も考慮の外におくことのできないものである。

ルカーチの『手稿』研究も、主として思想的視角からするものであり、また、マルクス主義の俗流的・客観主義的解釈を批判する意図を内在するものである。とはいへそれは、さきに見たマルクス思想の実存主義的把握と位置づけには、まっとうから対決する意図をもひそめているのである。すなわち、近代思想史をヘーゲル—キルケゴール—ニーチェの線できちんと対立してルカーチは、近代思想の展開を、弁証法的思

惟₁合理主義 Rationalismus と非弁証法的思惟₁非合理主義 Irrationalismus との対抗的発展において把握しようとする。この視角からかれは、マルクス主義をヘーゲルに源泉をもつ近代合理主義の完成形態とみなすのである。こうして、マルクス主義の基軸が唯物弁証法にもとめられることになることは、あらためていうまでもない。ところで、ルカーチが近代合理主義の骨格ととらえる〈弁証法〉は、かれの考えでは、もともと近代社会の経済的構造の悟性的反映たる近代の経済学、とりわけ古典経済学の諸成果を、概念的に把握して体系化しようとする試みのなかで、はじめて成立しえたものであった。このような視点からヘーゲルにおける経済学研究とそれにとづく弁証法の形成過程が追究され、ヘーゲル弁証法の中心概念として、〈外化〉Entäußerung の概念が抽出される。そしてこの概念を、フォイエルバハ、ジャコブンの民主主義および古典経済学の批判的摂取を媒介として止揚・発展させたものが、まさに『手稿』における〈疎外された労働〉の概念内容をなすものであった。こうして、ルカーチの見解によれば、〈疎外された労働〉の概念は、ヘーゲルよりも高い段階で、かついっそう徹底的に、経済学と弁証法との統一を実現したものであり、ここに観念弁証法の唯物論的改作は完成され、マルクス主義の基礎が確立せられたことになる。

(1) Vgl. G. Lukács: Die Zerstörung der Vernunft, 1955, Vorwort, s. 5 ff.

(2) Vgl. G. Lukács: Der junge Hegel, 1954, u. a. II. Kapitel, 5. Die ersten ökonomischen Studien: III. Kap., 5.

Die Ökonomie der jener Periode: 6. Die Arbeit und das Problem der Teleologie: 7. Die Schranken der Hegelschen Ökonomie.

(3) Vgl. a. a. O., u. a. IV. Kap., 4. Die „Entäußerung“ als philosophischer Zentralbegriff der „Phänomenologie des Geistes“.

(4) このことをマルクスの思想的発展に即して考察したが、*さき*にあげた論文 *Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx* の *49*。

以上みたように、ルカーチの初期マルクス研究は、マルクスによるヘーゲル弁証法の唯物論的転倒過程＝唯物弁証法の確立過程の追究という視点で一貫されているのであるが、かれの『手稿』解釈と評価にかぎって若干たちいって考察すれば、つぎの諸点が特徴的であるといえよう。

① フォイエルバハにたいするマルクスの関係——ルカーチによれば、マルクスはその思想形成過程において、フォイエルバハの立場を全面的に受け入れたことは一度もなく、ヘーゲルに対すると同様、最初から批判的摂取の立場に立っていた。⁽¹⁾ 『手稿』における〈疎外された労働〉の思想も、フォイエルバハの形而上学的自然主義・類の本質の思想にとどまるものではなく、むしろ、人間の真の自然史としての歴史を構想し、〈類的存在〉としての人間をその歴史のうちに組み入れる志向——「概略的ながら……弁証法的・史的唯物論の歴史観」の構想——をもつことによつて、フォイエルバハの限界の完全な克服をこころなしてあげている、とルカーチは主張する。⁽³⁾

② 〈疎外された労働〉の経済学的内容——『手稿』における古典経済学批判のためのマルクスの武器は、フォイエルバハを媒介として批判的に摂取した弁証法的思惟である。マルクスは、この弁証法の諸カテゴリーを経済学の諸問題、すなわち経済的存在の現実適用することによつて、労働そのものにおける対象化とは区別されたところの、資本主義特有の形態の労働における人間の自己疎外を把握したのであり、さらに、この〈疎外された労働〉が、資本主義社会の非和解的な階級対立そのものをたえず再生産することを洞察した。⁽⁴⁾ このようにルカーチは、マルクスが〈疎外された労働〉の概念によつて、資本主義的階級関係をその労働における関係として、

したがって生産関係として基礎づけ解明したとらえ、この点にその経済学的意義を認めるのである。

③ マルクス主義体系における『手稿』の意義——右のような内容をもつ〈疎外された労働〉の概念によってマルクスは、古典経済学の限界を克服するとともに、ヘーゲル弁証法の中心概念たる〈外化〉―〈疎外〉とその〈止揚〉の思想の観念論性にたいする批判を完成して、ここに唯物弁証法を確立した。そして、「のちにマルクスによってつくられたぼう大な数にのぼる諸定式の基礎が、……個々にはなく、マルクス独特の全体的方法論にもとづいて、ここに設定された」として、きわめて積極的な評価を『手稿』に与えているのである。

(1) Vgl. G. Lukács: Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx, *D. Z. f. Ph.*, 2/2. Jg. s. 296 u. s. 304 f. 前掲訳書、二五頁以下および五一頁以下。

(2) a. a. O., s. 338. 訳書、一五一頁。

(3) Ebenda, und vgl. Der junge Hegel, s. 636 ff.

(4) Vgl. Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx, a. a. O., s. 333 ff. 訳書、一三七頁以下。

(5) a. a. O., s. 331. 訳書、一三三頁。

3

右にみたルカーチの『手稿』および初期マルクス一般の研究にたいしては、その方法および結論的主張をまっこうから批判する立場がある。グロップの見解は、まさにその代表的なものである。

(1) グロップは「ドイツ哲学雑誌」*Deutsche Zeitschrift für Philosophie* の一九五四年第一号、第二号に「Die marxistische dialektische Methode und ihr Gegensatz zur idealistischen Dialektik Hegels. なる論文を発表した。これは「グロ

ブのことはを使えば、「ヘーゲル哲学がマルクス主義哲学の本来的な源泉」であるかに説いてマルクス主義の「観念論的歪曲」をくわだてる一派、を攻撃し、その批判の基礎たるかれ自身のマルクス主義解釈を提示したものである。

このグロップ論文で批判されているのは、ルカーチの *Der junge Hegel* のほか、*じぎのひとびと* の著作である。

Auguste Cornu : Karl Marx und die Entwicklung des modernen Denkens. Beitrag zum Studium der Herausbildung des Marxismus, 1950.

Ernst Bloch : Subjekt-Objekt. Erläuterungen zu Hegel, 1951.

Fritz Behrens : Zur Entwicklung der politischen Ökonomie beim jungen Marx, in *Zs. Aufbau*, Jg. 1953, Heft 5.

Derselbe : Hegels ökonomische Auffassungen und Anschauungen, in *Wiss. Zs. d. Karl-Marx-Univ.* Jg. 1952/1953, Heft 9/10.

グロップ論文の後半が発表された「ドイツ哲学雑誌」一九五四年第二号には、たまたまルカーチの *Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx* も掲載されていた。同誌編集部はそのときの第三号で、グロップ論文をきつかけに「マルクス主義とヘーゲル哲学との関係について」Über das Verhältnis des Marxismus zur Philosophie Hegels. というテーマで誌上討論をおこなうことを呼びかけ、以後二年余にわたって、一方ではヘーゲル＝マルクスの連続性を重視するルカーチに同調する論者と、他方では両者の断絶を強調するグロップ的見解にくみする論者とのあいだで、活発な討論がつけられた。ここでたたかわされた論議の概略は、すでに藤野涉氏（名古屋大学文学部研究論集「一九五七年Ⅷ」）や大野精三郎氏（一橋「経済研究」第八卷第三号所収、「ヘーゲルと古典派経済学」）らによってわがくににも紹介されているが、一九五六年秋、ルカーチにくみしてスターリン主義的・教条主義的なヘーゲル評価を公然と批判したヘーリヒ・Wolfgang Harich の論文のはじめの部分がのせられた同誌第四卷第五号が撤回されたのを機に、この討論は中断されてしまった。（Vgl. Iring Fettscher : Das Verhältnis des Marxismus zu Hegel, in *Marxismusstudien*, dritte Folge, 1960, s. 66 u. s. 154, Fuß-

note.) それ以後、ハンガリー事件なども関連して、ルカーチおよびかれに同調する論者はもっぱら批判の対象とせられ、正統派マルクス主義のあいだでは、グロップ流のヘーゲル—マルクス把握が公認のものとなっているようである。

グロップのルカーチ（およびコルニュ、ペーレンス、ブロッホ）批判の焦点は、「弁証法」を「思想史の連結環」*ideengeschichtlicher Bindeglied* として、ヘーゲルとマルクスの系譜的関連を強調する思想史の把握方法である。これにたいしてグロップは、哲学史における基本的対立が観念論と唯物論の対立であることを強調し、前者には形而上学的方法が、後者には弁証法的方法が、必然的・内的な関係にあると図式化する⁽¹⁾。この図式にもとづいてかれは、マルクス主義の弁証法的唯物論たる点を強調し、「マルクスはフォイエルバハから出発して、……「ヘーゲル的」観念論に対立して唯物論を、観念論的弁証法に対立して唯物論的弁証法をうちたてた⁽²⁾」のだと主張する。では、観念論的弁証法に対立する唯物弁証法は、いかにして形成されたのか。それは、グロップによれば、フォイエルバハから継承した唯物論を歴史と経済の領域に適用して、唯物論の「内容的な拡張」*inhaltliche Ausdehnung* をこころみたところにある⁽³⁾。「物質の弁証法は、素材そのもののなかに認識されねばならなかった⁽⁴⁾」であり、それは、具体的な一定の法則性のなかで、一定の・事実的・弁証法として見出されねばならなかった⁽⁴⁾。こうして、歴史の弁証法の把握—唯物史観の形成のうちに、その立場からみてはじめて、ヘーゲル観念弁証法に潜む「合理的核心」——それはヘーゲル哲学自体のうちにおいては、その全体的傾向に矛盾するものであった——を正しく評価し利用することができたのだ⁽⁵⁾、とするのがグロップの見解である。

以上のようなマルクス主義およびその系譜的関連の把握において、『経哲手稿』がいかなる位置づけを与えられるかは、おのずからあきらかであろう。『手稿』におけるマルクスは、グロップによれば、①唯物論の立場にた

って、②それを歴史および経験科学—経済学の領域に「拡張」し、③これによって歴史と社会の諸問題における〈労働〉の中心的な意義を把握するとともに、④その労働が、またそれとともにあらゆる社会的諸制度が、私的所有の存在のために、人間から疎外されていることを認識した。⑤唯物論と経済学研究によってこの〈疎外された労働〉を認識したのちにはじめて、マルクスはヘーゲル弁証法を批判的に評価することができたのである。⁽⁶⁾⁽⁷⁾

(1) Vgl. *D. Z. f. Ph.*, 1/2. Jg., s. 74.

(2) a. a. O., s. 89. — 傍点はシロマン。

(3) Vgl. a. a. O., s. 101, und *D. Z. f. Ph.*, 2/2. Jg., s. 345.

(4) a. a. O., s. 346. — 傍点はグロツプ。

(5) Vgl. *D. Z. f. Ph.*, 1/2. Jg., s. 110.

(6) Vgl. a. a. O., s. 99 ff. und *D. Z. f. Ph.*, 2/2. Jg., s. 357 ff.

(7) ここで、グロツプがマルクス主義の観念論的歪曲をおこなうものとして批判しているコルニュの『経哲手稿』評価をみておこう。それは、わたしのみるころでは、ルカーチの見解よりもむしろグロツプのそれに近いように思われる。コルニユは『手稿』の外面的素描を主内容とする小冊子 *Karl Marx, Die ökonomisch-philosophischen Manuskripte*, 1955. の最後に、〈疎外された労働〉の思想の意義と位置について、つぎのように述べている。

『手稿』において、疎外の問題は、ほんの萌芽的な段階の唯物論の立場から考察されているために、それはまだいくぶん形而上学的に、資本主義制度の中心問題であり主要標識であるととらえられているにすぎず、歴史発展の一契機として認識され説明されているなどとはとうていいえない。この意味で、『経済学・哲学手稿』は、マルクスがまだ唯物史観に到達していなかった『独仏年誌』の二論文と『ドイツ・イデオロギー』とをつなぐ本質的な連結環の役割をはたしたのである。

この『ドイツ・イデオロギー』では史的唯物論の本質をなす諸点がしあげられ、疎外の問題はもや中心問題としてではなく、私有財産制度によって条件づけられた一つの本質的な現象として考察され、生産力と生産関係の発展として把握された一般的な歴史発展の枠組のなかにはめこめられたのである」(a. a. O., s. 54)。

ここにみるように、〈疎外〉の思想は資本主義制度の中心問題を「いくぶん形而上学的に」把握したものにすぎず、けっきよく『ドイツ・イデオロギー』の一般的な史観のなかへ解消されるべき運命にあつたのだとみるコルニュと、〈疎外された労働〉の思想において唯物弁証法が確立され、これが『ドイツ・イデオロギー』のみならず、『資本論』体系にたいしても方法的基礎をなしているとみるルカーチの見解とのあいだには、無視できない差異があるとみるべきではなからうか。もっとも、両者の主張がそれぞれ内容的にあとづけられないで、外的な現定づけにとどまるかぎりでは、その差異もたんに重点のおき方ないしは視角のちがいに還元されかねないが、それにしても、コルニュをルカーチと近い立場にたつ初期マルクス研究者とみるグロップの評価は当っていないとわたしは思う。なるほど両者ともマルクスをヘーゲルとの関連に重点をおいて考察する点では共通しているが、その問題意識はかなり異なっているようである。コルニュの主要な関心は、初期のマルクス思想の実証主義的な研究であり(この意味ではかれの大著 *Karl Marx und Friedrich Engels, Leben und Werk, ester Band, (1818-1844), 1954* はひじょうにすぐれたものである)、かれのマルクスおよびマルクス主義理解は、むしろ公式主義的なそれに近いものといえよう。

右にみたグロップの初期マルクスおよび『手稿』の解釈と位置づけは、ルカーチの見解にたいするまっぴらキアンチテーゼとして、いわゆる正統派の見解を代表するものであるが、それは、マルクス主義と先行諸思想との系譜的関連のみならず、マルクス主義理解一般にかんして、きわめて大きな問題を内包しているものといわねばならない。ここではそれらの問題全般にわたって検討をくわえることはできないが、とりあえず若干の論評をおこ

なっておくことにする。

端的にいつてグロップの見解は、あまりにも図式主義的であり、客観主義的である。かれにあつては、マルクス主義は悟性的経験科学の綜合、というよりもたんなるよせ集めに解消せられ、そこにおける若干の抽象的な諸法則、諸定式が唯物弁証法の内容をなすかに考えられている。これに対応して、マルクス主義の形成過程のみならず、一般にすべての思想が、唯物論⁽¹⁾ 弁証法⁽¹⁾ 進歩、と、観念論⁽¹⁾ 形而上学的方法⁽¹⁾ 反動、という図式で機械的に評価しきられてしまうことになっている。このような方法によつて、かれの論ずるヘーゲルもマルクスも、死せる抽象物になり果てているといつても過言ではなからう。一般に、マルクス主義の系譜的関連を問うばあい、その研究方法自体が弁証法的に、すなわち、区別と同一性をあきらかにしたうえで全体を評価する視点を問うばあいでおこなわれなければならない。したがつて初期マルクスの思想を把握するためには、先行の諸思想との区別と同一性における全体がとらえられなければならないとともに、それがのちのマルクスの思想体系にたいしていかなる関連にあるかが、おなじく区別と同一性において確定されねばならないのであり、そのうえではじめて正しい評価づけを与えることができるのではなからうか。

(1) *Vgl. D. Z. Ph., I/2, 18. s. 73 ff.*

この視点からみるならば、ルカーチの『手稿』研究も、なおまつたき具体性にあるとはいいがたい。というのはルカーチは、『手稿』がのちに確立されるマルクスの諸定式の基礎を、全体的方法論にもとづいて準備していると主張してはいるものの、たんにそのことを指摘するにとどまつて、この主張を、唯物史観および『資本論』に結晶するにいたるマルクス思想の展開過程とその成果との関連において、具体的に論証するところみを、どこ

にも示していないからである。もっとも、このことをルカーチの欠陥として指摘するのは、「若きマルクスの哲學的發展」を研究するというかれの視角上の限定、さらには、ヘーゲルを起源とする弁証法的思惟¹近代合理主義の流れのなかにその完成形態としてマルクス主義を位置づけようとするかれの研究の主眼を考慮にいれるならば、当然ぬことであり、不当な注文をつけることになるかもしれない。しかし、マルクス主義を全体としてとらえ、そのなかにおける『手稿』の位置を確定しえんがためには、右のルカーチの視角そのものがむしろ問題とならざるをえないと思われるのである。ルカーチの見解および『手稿』の位置づけは、グロップの批判にもかかわらず、後者流の客観主義的・固定的なマルクス理解を克服するひとつの基礎を提供した点できわめて積極的な意味をもっている。このことは十分にみとめられねばならない。しかし、『手稿』においてヘーゲル批判の完成²唯物弁証法の確立がおこなわれ、マルクス主義体系の礎石がぎざかれたとしても、そのことのたんなる言表にとどま³ているかぎり、それはいまだ直接的・抽象的な仮説にとどまるほかないであろう。『手稿』およびそこにおける〈疎外された労働〉の思想が、ルカーチがのべるように、マルクス主義体系構築の出発点であるとすれば、それが結果としての体系——その具体的形態としての『資本論』において、いかに具体化されて存在するか、ということが解明されてはじめて、「出発点」としての『手稿』の位置づけが客観性をうけとることができるのである。ルカーチがこのような視角をもっていないかぎりにおいて、かれのすぐれた研究も、なお、唯物論を歴史と社会の諸問題に適用したところにマルクス主義が成立したとみるグロップの客観主義的理解と同一平面で対立するところの、弁証法を歴史と社会の諸問題に適用した体系がマルクス主義であるといった、抽象的な議論に低迷することに⁴もなりかねない要因を残しているものといわねばなるまい。

(1) ついでながら、右のべた点と関連して、ルカーチの〈弁証法〉把握について二つの点を指摘しておきたい。

第一点は、弁証法における「方法」と体系の問題にかかわりをもつ。ヘーゲルもいうように、弁証法とは事柄 *Sache* ないしは内容に外的なたんなる形式ではけっしてなく、「全構造の魂」「事柄そのものの行程」である（ヘーゲル『大論理学』、武市健人氏改訳、上巻ノ一、四〇頁）。そしてこの事柄そのものの行程の全体が、ほかならぬ体系を構成する。したがって、弁証法というばあい、そこには当然方法と体系が有機的に統一してあるものと考えねばならない。それゆえマルクスがヘーゲルの弁証法を批判的に継承しえたたとすれば、そのことはかれがヘーゲルの弁証法的方法と同時に、それと不可分の関係にあるヘーゲル哲学の学的体系性をも批判的に継承したことを意味するものでなければならぬであろう。（この点についてくわしくは、梯明秀氏『ヘーゲル哲学と資本論』第一章『資本論』の学的体系性」、および『立命館経済学』第七巻第六号所収の同氏の論文『資本論』体系の図式的解明（上）』の第一節「方法と体系との関連」を見られたい。）ところがルカーチの初期マルクス研究において、ヘーゲル—マルクスの系譜的関連の中心に〈弁証法〉がおかれるとき、その〈弁証法〉は〈外化〉〈疎外〉の概念を中心とするすぐれて方法としての視角からとらえられており、ヘーゲルの弁証法的体系をマルクスがいかに批判的に継承したかという視角からの考察は、ほとんどなされていないように思われる。したがって『手稿』研究においてルカーチは、ここでのちのマルクスの諸定式の基礎が、かれ独特の全体的方法論にもとづいて設定された、と指摘しながらも、それがいかなる体系的構造にあるかを具体的に説明することはおこなっていないのである。

第二の点は、弁証法における主体性の問題に関連する。ヘーゲルの弁証法は、もともとその成立の基礎を——ルカーチが主張するように（Vgl. G. Lukács: *Der junge Hegel*, 1954, s. 374ff.）——労働過程の概念的把握にもつものであるとしても、というよりもむしろ、労働過程一般の概念的把握にとどまっているがゆえに、それは過程的な性格をもっている。そしてその一般化においては、実体即主体としての絶対精神の自己認識の過程として、円環的な、過程的弁証法であることは周知のことである。そしてそこにヘーゲル哲学の客観的観念論たるゆえんがある。ところで、マルクス主義の形成過程を

ヘーゲル弁証法の唯物論的転倒の過程として考察するルカーチが、『手稿』において唯物弁証法が確立せられたとするばあい、その『唯物弁証法』は、古典経済学を媒介とするところのヘーゲル弁証法のたんなるうらがえしとして、それ自体過程的弁証法としてとらえられるにとどまっているのではないかと思われるのである。もちろんルカーチは、『手稿』においてマルクスが、ヘーゲルの疎外とその止揚の概念を克服して、現実的疎外と、その現実的実践的な止揚を対置したことを強調する。そしてこのことが可能であったのは、マルクスが新しい階級的立場すなわちプロレタリアの立場にたっていたからこそであることを指摘してゐる (Vgl. G. Lukács: Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx, a. a. O., s. 336 中前掲訳書、一四六頁以下)。このこと自体はきわめて正当であるといわねばならない。しかしながら、プロレタリアの立場にたつてはじめて歴史と社会の現実的弁証法を把握しえたということが、その論理的意味において深められることなく、たんに外的にとらえられるかぎりでは、右にのべたように、唯物弁証法は社会と歴史の物質的過程の一般的概念化として客観的に理解されるほかになく、プロレタリアは、そこにおいて物質的過程の概念が反映されるところの受動的な場所として客観的に規定されるにとどまることになる。このような唯物弁証法のたんに過程的な理解からは、マルクス主義に当然ひそんでいるはずの主体性の契機を正しく理解することは不可能であろう。マルクス主義における主体性は、プロレタリアを歴史発展の对象的主体として、あるいは、物質的過程の自己運動がそこにおいて受動的に意識される認識主体として、客観的に規定することによって尽くされるものではなく、自己疎外され非人間化された定有にあるプロレタリアが、自己の定有において自己否定的に自己の本質を自覚するところに成立するものでなければならぬ。そして、このような主体的自覚——唯物弁証法におけるさきにもべた過程的性格にたいして、かかる自覚主体をその場所的な契機とよぶとすれば、場所的自覚——において受けとめられた物質的主体が、自己を遡源し、さらに自己自身を反省的に規定してゆくところに、現実的・对象的過程の弁証法が認識せられ、定立せられるのではなからうか。したがってマルクス主義弁証法が過程的性格をもっていることは真実であるといえ、それはヘーゲル弁証法のたんなるうらがえしとしてとらえられるべきものではけつしてなく、プロ

レタリアの自己否定的な主体的・場所的自覚を媒介とし、それをエレメントとして成立するものであることが確認されねばならないのである。

（二） 方法的視角からの諸研究

さきにわたしは、ルカーチの『手稿』研究が、のちに確立される唯物史観とマルクス経済学——その実現形態としての『資本論』と、〈疎外された労働〉の思想との関連を具体的に、説明しようとする視角をもたないかぎりにおいて、なお抽象的にとどまっている点を指摘した。この関連を自覚的に説明しようとする研究としては、さきに見たように、『手稿』の〈疎外〉の思想を『資本論』第一巻第一章商品論の「商品の物神崇拜的性格」のなかにみいだし、両者を関連づけて現実的ヒューマニストとしてのマルクス像を描きだそうとするレーヴィットラのところみ、さらにまた、のちにふれるように、〈疎外された労働〉の概念の経済学的内容に重点をおいて、それはのちには価値・剰余価値論に止揚され放棄されてしまったのだとするヤーンの見解、などがある。が、この問題を主として『手稿』と『資本論』との方法的、関連に重点をおいて具体的に究明し、独自の見解をうちだしているものとして注目すべきは、清水正徳、梯明秀両教授の所説であろう。

1
まず、清水正徳教授の見解をとりあげよう。

（一） 主題にかんする氏の論文としては、「自己疎外論の発展」（神戸大学『研究』第十三号所収）、「実体と形態」（玉城・末水・鈴木氏編『マルクス経済学体系』上巻所収）、「自己疎外」（小松撰郎氏編『講座今日の哲学Ⅳ、人間論』所収）など

がある。いずれにおいても『手稿』評価、およびそれと『資本論』との関連については同一の主張をのべておられるので、ここでは「実体と形態」をとりあげる。()内のページ数は、『マルクス経済学体系』上巻のページを示すものである。

清水教授は、『手稿』におけるマルクスの「重要な一テーマ」は、貨幣ないし資本の労働主体に対する支配を「労働の疎外」として、これを即自的な労働過程から展開することにあつたとし(二四頁)、このテーマをマルクスがいかに説明しようとしているか、に考察の焦点をしばられる。マルクスはこの問題を、「どのようにして人間は自己の労働を疎外するようになるのか? この疎外は、人間の発展の本質のうちどのように根ざしているのか?」という「論理的に明確な問題」として提起し、この説明をば、「事実、出来事の形式のもとに前提している」古典経済学の私有財産把握を克服する自己の課題としたのであつた(同上)。このようにマルクスの問題意識を集約すれば、それに応える具体的な展開は、当然、「労働と交換とのあいだの必然的な関係」の論理的解明(二五頁)とならねばならない。

ところで、清水教授によれば、『手稿』のマルクスにおいてとらえられた「即自的な労働過程」すなわち「疎外されない人間」労働は、フォイエルバハの直接の影響のもとに、Humanismus-Naturalismusの立場からとらえられた「類的存在」・共同体における人間労働、したがって人間の自己対象化と自己享受を根幹とする「人間の原本的行為としての労働」であつた。そしてこの類的存在としての人間の労働を、マルクスは「始元において」のである(二六頁)。しかしながら、「有機的な共同体の成員が、まったく個人と全体との分裂なしにかれらの使用価値をつくってゆくような活動としての労働と、その労働生産物との連関のうちに、疎外への展開を期待することは、まったく不可能」であり、したがって「労働と交換との必然的連関」の概念的解明も、ついに展開

できない（同上）、と清水教授は主張されるのである。

こうして、教授にしたがえば、〈疎外された労働〉を軸とする近代の経済構造の解明は、その苦闘にもかかわらず、「アポリア」にぶつからざるをえなかった（二三頁、二七頁）。では、マルクスはこのアポリアをどのようにしてのりこえたのか。教授の説かれるところを要約すれば、

① マルクスは、「疎外された人間」に「疎外されない人間」を対決させるにすぎない Humanismus-Naturalismus の立場 〓 「哲学的良心」をいさぎよく「清算」して（二七頁）、

② 唯物史観の把握により、共同体から近代にいたる経済構造の展開（〓類似的共同体からの商品交換の発生）が、社会の現実的土台における生産力と生産関係の矛盾によって生じたものであることを先取し、しかしこの認識を「直接的に方法的」に生かすのではなく「むしろ消極的な前提」としながら（二七―八頁）、

③ 科学的態度の徹底において、あらためて疎外の現実におけるもつとも抽象的な範疇——純粹に形態規定としての〈商品〉をとらえて、これを経済学展開の始元とするにいたった（二八頁）、とされるのである。

したがって清水教授にしたがえば、『手稿』における〈疎外された労働〉の思想は、方法的には、まったく「資本論」とかわりをもつものではない。むしろこれは、生産力と生産関係の理論 〓 唯物史観の発見とともに、「哲学的良心」として清算されたものだと考えられるわけである。そしてさらに、この唯物史観も『資本論』とは直接的方法論的関連をもたず、ただ「消極的な前提」であるにすぎない、とされるのであるから、『手稿』と『資本論』とのあいだには二重の断絶が存在し、両者は方法的・体系的には、まったく否定関係にあるものとみなされているわけである。

以上の清水教授の見解は、教授みずから明言されているように、『資本論』の展開がまず流通論から始めらるべきであるという学説」、すなわち宇野弘藏教授の『資本論』解釈の立場から『手稿』を分析・評価したユニークな所論である。そして『手稿』と『資本論』とのあいだに存在する方法論上の区別をば、自覚的に究明されるべき問題として提起しておられることは高く評価されるべきであり、さらに、この区別をほりさげて、教授なりに首尾一貫した解釈を確立しておられることには敬意を表したい。が同時に、わたしとしては、清水教授の見解にはかなり根本的な点で、疑問をいだかざるをえないのである。

なによりもまず問題なのは、教授が「疎外された労働」の思想を、疎外された人間と類的存在としての人間とを抽象的・外的に、対立せしめたフォイエルバハ的思維様式にあるものと把握される点である。もしそうだとすれば、なるほど教授がいわれるとおり、そこからは歴史の論理の展開は不可能でなければならない。だが、『手稿』ははたしてそのような抽象的な対立を設定したものであろうか。そしてここでマルクスが自己の立場としてかかっている「完成された人間主義」『vollendeter Humanismus』-『Naturalismus』とは、基本的にはフォイエルバハの立場を一步も出ていないものといえるかどうか。なるほどマルクスの「類的存在」とかいった用語は、フォイエルバハからうけついだものでもあろうが、その用語をもちいてマルクスが展開した独自の思想内容がどのようなものであったか、が追究されねばならないのではなからうか。マルクスは『ドイツ・イデオロギー』——周知のように、ここでかれは「それまでの哲学的良心を清算した」とのちにのべているのであるが——のなかで、唯物論的世界観はフォイエルバハを超越したところに生成した、として、つぎのような注目すべき叙述をおこなっている。すなわち、フォイエルバハによつては説明されなかった問題——宗教的幻想を人間が信じこむ

ようになるのはどうしてか、という問題が、「ドイツの理論家たち〔もちろんマルクス自身をもふくむ〕にたいして、世界の唯物論的な見方への道をきりひらいた。すなわち、無前提的な見方ではなくて、現実的な物質的諸条件之ものを經驗的に觀察する見方、したがってはじめて本當の批判的な見方への道をきりひらいた。この進路は、すでに、独、仏、年、誌、に、の、せ、た、ヘ、ー、ゲ、ル、法、哲、学、批、判、序、説』および『ユ、ダ、ヤ、人、問、題、に、よ、せ、て』のなかに示唆されていたものである。もっとも、これは当時まだ哲学的な慣用語法でなされたため、ここに伝統的にまぎれこんでいた人、間、的、本、質、menschlches Wesen や、類、Gattung などのような哲学的表現は、ドイツの理論家たちに現実的な展開を誤解させる機縁を与えた」と。⁽¹⁾『手稿』の〈疎外された労働〉の思想についても、そこにひそむ「現実的な展開」を把握することこそが問題でなければならぬ。清水教授は、「伝統的にまぎれこんでいた哲學的表現」から『手稿』におけるマルクスの思想を帰納的に理解されているが、このような方法では、もともと、「哲學的良心として清算」されるべき思想内容しかとらええないはずである。ところがわれわれの眞の関心は、「哲學的表現」の背後にひそむ現実的な思想内容なのである。

(1) Marx/Engels, Werke, 3, Dietz Vlg. 1958, s. 217-8. 古在由重氏訳『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫、一七六―七七頁。——傍点は引用者。

そのほか、『手稿』におけるマルクスの主要問題を、「始元」としての〈疎外されない人間〉の共同体から〈交換〉を論理的に演繹することにあつたと限定される点（私見では、それもたしかにマルクスの一主要テーマであつた）はちがいないが、かれが『手稿』でとらえた「始元」は、むしろ自己疎外の徹底にあるプロレタリアの實在的自己意識であり、これを始元として〈疎外されない人間〉共同体Ⅱ人間の普遍的定有を實現することこそが、『手稿』のマルクスの主要問題であ

ったのではないかと思われる。また、この論理的演繹はアボリアにぶつかるべき不可能事であったとされる点、さらには、唯物史観と『資本論』との関連、『資本論』そのものの解釈、などについて、多くの疑問をもつのであるが、それらの点についての検討は、ここではさしひかえておく。

ただ、『手稿』を『資本論』との関連において研究するばあい、一定の『資本論』解釈を前提として『手稿』を分析・評価するにとどまるのは一面的であり、同時に他方、『手稿』そのものの内在的研究から『資本論』の分析把握がこころみられなければならないであろう。このような視角から『手稿』そのものの内容、およびそれと『資本論』との方法論的関連を追究して、すぐれた成果をあげておられるのが、梯明秀教授である。

2

梯教授は、一方で『手稿』の〈疎外された労働〉の概念内容の分析（先行諸思想との関連において）をおこなって、そこに『資本論』との内容的関連を先取されるとともに、他方、『資本論』そのものの体系的・方法論的分析をこころみられ、そこでえられた成果にもとづいて、ひるがえって〈疎外された労働〉の思想の体系的・方法論的内容把握をおこなっておられる。⁽⁴⁾ こうしてきわめて具体的なマルクス把握の立場を確立しておられるように思われる。

(1) 「物質の哲学的概念」(初版一九三三年)、「社会の起源」(初版一九三六年)を基盤として、「資本論の弁証法的根拠」(初版一九四八年。ただしここに収録された四論文はいずれも一九三四—五年の執筆になるもの)におさめられた四論文にはじまり、最近の諸労作にいたる梯教授のマルクス主義の体系的把握の研究は、まさしく、『手稿』と『資本論』との関連においてマルクス主義の方法論的・体系的構造を説明しようとする一貫した意図のもとにおこなわれているかのようである。

したがって教授の『手稿』研究の文献としては、これまでに発表されたすべての労作をあげるべきであろう。このくわしい文献目録は、辻村一郎氏編『世界観の論理的基礎づけ』（ミネルヴァ書房、一九五九年）一〇九—一一〇ページに収録されている。

(2) とりわけ、「人間労働の資本主義的自己疎外」（『資本論の弁証法的根拠』所収）、「弁証法」（『現代の唯物世界観——社会と弁証法』所収）をみよ。

(3) とりわけ、『ヘーゲル哲学と資本論』、『資本論』体系の図式的解明（『立命館経済学』第七卷第六号、第八卷第一、二号所収）をみよ。

(4) とりわけ、「市民社会における市民の人間の自己解放」（『資本論の弁証法的根拠』所収）、「四四年手稿断片『疎外された労働』におけるマルクスの哲学思想」（『立命館経済学』第三卷第五、六号、第四卷第一、二号所収）をみよ。

『手稿』の意義内容、および『手稿』と『資本論』との関連についての梯教授の見解の要点は、つぎの一文に集約的に表現されているとみることができらる。

「マルクスの経済学批判の根底に横たわる方法は、唯物論的世界観に基礎をもつマルクス固有の弁証法であり、ヘーゲル的な巨大な歴史感覚を経済学的対象としての歴史の实在において確実なるものにしたところの、歴史的現実にたいする認識方法である。すなわち、現実のうちに理性を認識せんとするヘーゲルの〈概念的把握〉^{ベグライファエン}ということを、唯物論的に具体化したところの方法であった。このマルクスの概念的把握の方法は、ヘーゲルのそれがたんに思弁的であったのにたいして、感性的な対象の实在にたいする科学的認識を不可欠の契機とするものであるが、このことは、近代に発生し発展してきた経済学にたいする批判を媒介してのみ成立しえたことなのである。そしてマルクスは、一八四四年の『手稿』において、この方法を国民経済学的事実に適用してすぐれ

た成果をあげたのであった。すなわち、そこにおいてかれは、まず、国民経済学がたんに実証主義的にしか問題にしなかつた私有財産の事実を、この事実から出発して、その概念にまで分析的にほり下げ、この概念の要素形態から、漸次その規定を複雑にしながら復帰してゆく上向的な論理過程の到着点としての、最初の現実的事実において、私有財産についてのブルジョア的な観念を否定する批判的な概念を、再構成しているのである。

この『手稿』において、その概念的把握の対象となつたブルジョアの私有財産は、経済学的範疇としての資本にほかならないのであるが、この資本という範疇規定において把握されている近代ブルジョア社会全体にたいし、『手稿』において実現された唯物論的な概念的把握が適用されるにいたつたとき、『資本論』の体系が成立するにいたつたと、われわれは推定しうるであらう。⁽¹⁾

(1) 梯明秀氏『ヘーゲル哲学と資本論』一九五―六頁。ただし文章の配列に若干の変容をおこなつた。

右の引用文にみるように、梯教授は、

① 『手稿』の〈疎外された労働〉の思想において、ヘーゲルと近代の経済学との相互止揚による唯物論的、概念的把握の方法が、確立せられていることを重視される。ところでこの方法は、ただたんに形式的な〈方法〉にとどまるものではなく、思弁的即科学的なものとして、科学と哲学との具体的統一としての体系を成立せしめるものなのであり、このような体系性との同一性における概念的把握の方法が、マルクスに独自の思惟様式＝マルクス固有の弁証法の根幹であるとみられるわけである。

さらに他の著作をあわせ読んで、教授の見解の独自のかつ重要な点を指摘すれば、

② 右ののべたような具体的な概念的把握の方法は、自己疎外の徹底にある賃労働者が、自己の定有において

自己の本質を自覚するところに成立するものであり、この論理を解明した〈疎外された労働〉の概念は、ブルジョア社会の客観的認識の論理であるとともに主体的変革の論理であり、また、賃労働者が自己の普遍的本質を反省的に遡源するところに構成さるべき歴史の論理でもある。

③ 〈疎外された労働〉の概念の経済学的内容についていえば、それは、労働過程の資本主義的自己疎外において実存する価値増殖過程の論理を闡明したもので、したがって、資本の原因、根拠としての疎外された労働を概念的に把握したものであり、それは同時に、私有財産制度一般——階級関係一般の論理を概念的に把握したものである、と教授は主張されるのである。

以上にみた梯教授の見解は、〈弁証法〉をルカーチよりもいっそう深く具体的な意味にとらえて、後者が仮説的に与えている『手稿』の方法論的・体系的な意義規定をば具体的に展開したという意味を、客観的にはもつものといえるのではなからうか。そして、ルカーチおよび梯教授によるヘーゲル—『手稿』—『資本論』の研究によって、『手稿』の思想史のおよび方法論的・体系的意義についての究明は、すでに到達しうべき水準にたっているかに思われる。

とはいえ、なお問題はのこっている。さきにもみたように、梯教授は『手稿』における「私有財産」イコール「経済学的範疇」としての資本」ととらえ、「この資本という範疇規定において把握されている近代ブルジョア社会全体にたいし、『手稿』において実現された唯物論的な概念的把握が適用されるにいたったとき、『資本論』の体系が成立するにいたった」と推定されるのであるが、——そしてこの推定をば教授は、方法論的には、その『資本論』研究においてみずから論証しておられるのであるが、——しかし経済学のおよび経済理論的には、な

お『手稿』と『資本論』との関連は、かならずしも明確ではない。この点をあきらかにするために、まず、『手稿』の基軸をなす〈疎外された労働〉の概念の経済学的意義と経済理論の内容を、『手稿』のものにそくして内在的に解明する必要があるであろう。この課題の実行は、これまでに考察した諸研究の成果によって容易にされているはずのものである。つぎに節をあらためて、経済学的視角からする諸研究を二、三とりあげて概観する。

(三) 経済学的視角からの諸研究

『経済学・哲学手稿』にかんする思想的な視角からの研究は、主として哲学者によってはやくから着手され、注目すべき成果をあげてきたのであるが、『手稿』の経済学的意義内容の検討は、ひさしく等閑にふざれていたようである。このことは、『手稿』が「国民経済学の批判」を主眼とする内容をもつものであることをかんがえるとき、奇異な現象であると思われるかもしれない。だがそれにはそれなりの理由があるといえそうである。というわけは、いわゆる正統派マルクス主義のあいだでは、「科学」としてのマルクス主義を強調するのあまり、マルクス主義を総体的な学として把握しようとする態度が排斥される傾向があった。(そして残念ながらこの傾向は、さきにもたように、現在でも根強く存在するといわねばならないようである。たとえばグロップ。)

この傾向はおのずから、一八五〇年代以後のマルクス、ないしはせいぜい『ドイツ・イデオロギー』を起点とするマルクスの著作をば、本来のマルクス主義を体現したものととらえ、それ以前の段階のマルクスは、旧来の思想から脱却していかないものとして軽視ないしは無視する風潮を一般化せしめたのである。周知のこの風潮に対応して、マルクス主義が科学としての経済学の側面に重点をおいてとらえられ、このように把握されたマルクス主

義の研究法そのものが、実証主義的、というよりも教条主義的におこなわれてきたわけである。したがってマルクス主義およびマルクス経済学をばその形成史に内在して把握し、そこから現代的発展の方向をさぐるという視角は、経済学者のあいだでは一般に没却されていたということができよう。

ようやく近年になって、『手稿』の経済学的意義をさぐるうとする労作がいくつか公けにされた。これは、いずれにせよ喜ぶべきことであるといわねばならない。

1

まず、ローゼンベルクの遺稿『一九世紀四〇年代におけるマルクス・エンゲルスの経済学説の発展の概要』⁽¹⁾をとりあげよう。この書物は、一八四〇年代におけるマルクス・エンゲルスの知的発展の過程を経済学者の立場からあつげた労作としてユニークなものであり、とりわけこれまでほとんど問題にされなかつたパリ時代のマルクスの経済学研究ノートにかなりのページをさいてこれを紹介していることは、ひとつの功績であるといえよう。

- (1) Д. П. Росенберг: *Очерки развития экономического учения Маркса и Энгельса в сопоставлении XIX века, Москва* 1954. 副島種典氏訳『初期マルクス経済学説の形成』、大月書店。以下、引用文のあとの()内の数字は、訳書のページをさめす。

- (2) これは、本稿六二ページ注(2)でふれておいたものである。マルクスは一八四四年三月ごろから八月にかけて——したがって『経哲手稿』執筆の直前から同時期にかけて——、スマイス、リカード、ジェイムズ・ミル、セイをはじめ、英仏の著名な経済学者の著作を読んで抜萃し、そのいくつかには評注をくわえている。この抜萃ノートの大部分が、M.E.G.A.の第一部第三巻に収録されているわけである。ここでマルクスが研究対象としている経済学者とその著作について詳しくは、杉

原四郎氏『ミルとマルクス』ミネルヴァ書房、七九頁の注(3)を参照されたい。また、M・E・L研究所編、岡崎・渡辺氏訳『マルクス年譜』青木書店、二九頁をみよ。——なお、この抜萃ノートを正面からとりあげたわがくにの研究者による研究としては、このノートのなかでもっとも注目すべき「ミル評注」(J・ミル『経済学綱要』[Elements of Political Economy]からのぬきがきにマルクスがくわえた評注)を分析した重田晃一氏の労作「初期マルクスの一考察——経済学批判への端緒としての『ジュームズ・ミル評注』を中心として——」(関西大学『経済論集』第八卷第六号所収)が、おそらく唯一のものである。

さて、〈疎外された労働〉の概念にかぎってローゼンベルクの見解を考察するとき、つぎの諸点が注目されるべきである。

① ローゼンベルクは、『手稿』においてマルクスが「私的所有」といふばあい、これによってかれが直接に念頭においているのは「私的所有のブルジョアの形態」||「資本」であることを認めてはいる(一五二頁)。したがってここでのマルクスの関心は、「私的所有一般ではなくて、……資本制的私的所有」に固有な、資本||賃労働関係の内的論理の究明にあると、ローゼンベルクはかんがえていくわけである(一六一頁)。だがかれは、〈疎外された労働〉の第一規定である「疎外された労働生産物」の概念内容をマルクスにしたがって吟味して、この概念を規定する三つの契機——(一)労働者は労働生産物をうばわれる。(二)労働生産物は、労働者に無縁な物的世界としてかれに対立する。(三)労働者を隷属させる。(二五二頁)——を区別し、つぎのように述べている。「最初の二つの規定における労働生産物の疎外は、古代社会でも封建社会でも生じた。そこでも、生産物はその直接的生産者である奴隷や農奴からとりあげられ、そしておなじく、かれらには無縁で敵対的な、そしておなじくかれら

の抑圧者・搾取者に属する物的世界として、かれらに対立していた。労働者からの労働生産物の疎外の過程であらわれる私的所有の支配は、あらゆる敵対的な階級的な社会構成体に共通である。じつにこの疎外の過程を、マルクスはかれの初期の草稿で研究しているのである（同上）と。したがってローゼンベルクは、〈疎外された労働〉の概念は直接には資本⇨賃労働関係の解明を意図したものであったにもかかわらず、当時マルクスが「個々の経済的構成体の特殊性にかんする学説をまだしあげていなかった」（同上）がために、「あらゆる敵対的な階級的な社会構成体に共通」な労働形態の特徴づけをも包摂する意義をもつ結果となっていることを指摘しているわけである。これは示唆するところ大きいものといえるのではなからうか。

② さらにマルクスは、『手稿』においては「私的所有」についてのべるにあたって、小生産者のな所有と資本制的所有とを区別していないのであるが、このことをいちおう認めつつもローゼンベルクは、つぎのようにいっている。「しかし、どのようにして私的所有が、労働を生産者から疎外しつつ、それ自身変容して（ヨリ正確にいえば、そのなかに伏在している敵対の本質を展開して）、私的所有によって疎外された労働の生産物となつたかをしめしたマルクスは、この分析によってすでに、両者（小生産者の所有と資本制的所有）を区別するところのものをはっきり特徴づけている。一般的にいえば、マルクスはすでに右の分析によって、『資本論』第一巻第二章で古典的に叙述されている『商品生産の所有法則の資本制的取得法則への転化』という理論に、まさに到達しかかっているのである」（一六二頁）。

右の文章はローゼンベルクがかれの本文にたいする注として付加しているものであるが、『手稿』においてマルクスがすでに商品生産と資本制的生産との取得法則の区別をはっきりと特徴づけているのだというこの指摘も、

きわめて示唆にとむものといわねばなるまい。

もつとも、右にみた二つの点は、どこまでも「示唆」を与えているにとどまるものである。というのは、ローゼンベルクは、〈疎外された労働〉の概念がふくんでしていると推定しうる諸契機を、断片的に指摘するにとどまっているからである。かれの考察方法はまったく外的なものであって、かれが指摘する諸契機のこの概念そのものにおける内的関連はいっこうにあきらかでない。このような外的な考察方法は、つぎの点にも典型的に示されている。すなわち、

③ ローゼンベルクは〈疎外された労働〉の概念にマルクスが与えた諸規定を逐次解説しながらも、この概念の第三の規定としてマルクスがあげているもの、すなわち「人間の類からの疎外」をまったく無視して、これについては一言もふれていないのである。これは、われわれがさきに見た『ドイツ・イデオロギー』のなかのマルクスのことば——『独仏年誌』の二論文などにおける〈人間の本質〉や〈類〉といった「哲学的表現」は、「伝統的にまぎれこんでいた」ものであって、これはかれの「現実的な展開」を一般に誤解させる機縁を与えた、ということば——を考慮してのことであるのかもしれない。しかし、初期のマルクスの著述から「哲学的表現」や哲学的命題を外的に排除してみたところで、ただちにそこにマルクスの「現実的な展開」が見いだされるものではないであろう。〈疎外された労働〉の概念にしても、それはその四つの規定の統一においてとらえられてはじめてまったき意味をもちうるはずのものであり、とりわけ「類からの人間の疎外」の規定は、マルクスの「国民経済学批判」を徹底的なものたらしめる原理的な意味をもっていたのではないかとおもわれるのである。ローゼンベルクは「類からの疎外」という哲学的表現とともに、それによって表現されているはずの現実的な内容をも除去

しているのであって、これはタライの水といっしょに赤ん坊まで流してしまうたぐいの態度といわれねばなるまい。われわれにとつて必要なことからは、〈疎外された労働〉の概念をば、マルクス自身がのべているままに四つの規定の統一としてその現実的な内容において把握することであり、このような内在的な把握によつてはじめてこの概念の真の意義と限界をあきらかにしうるのではなからうか。

2

ヤーンの論文「カール・マルクスの初期の著作における労働の疎外の概念の経済学的内容」⁽¹⁾は、ローゼンベルクの〈疎外された労働〉概念の理解にしたがいつつ、マルクーゼやティエール、ポピッツなどの『手稿』——およびマルクス主義一般——解釈を批判する意図のもとに書かれたものである。

(1) W. Jahn: Der ökonomische Inhalt des Begriffs der Entfremdung der Arbeit in den Frühschriften von Karl Marx, in *Wirtschaftswissenschaft*, 1957, No. 6. ——ここでヤーンは、〈疎外された労働〉概念の経済学的内容把握についてはまったくローゼンベルクにしたがうとともに、マルクスの思想形成過程におけるこの概念の位置づけにかんしては、コルニエに依拠している。本稿八二ページ注(7)に引用したコルニエの見解を参照されたい。なお、以下の本文中()内の数字は、右の *Wirtschaftswissenschaft* 誌のページを示す。

このヤーンの論文で注目すべき論点は、『手稿』における〈疎外された労働〉の概念と労働価値論との関連——否定的関連——に着目して、前者の経済理論的限界を主張していることである。すなわち、ヤーンによれば、当時のマルクスは「労働価値論を否認し、これに敵対する立場をとっていた」(八五二頁)。このためにマルクス

は、労働の性格の分析にあたって価値の問題から出発せずに、「労働の疎外という哲学的な視角から出発した」(同上)のであるが、このことは、マルクスをして古典経済学的な労働価値論の矛盾におちいらすに生産過程における搾取関係⇨生産関係を把握することを可能ならしめたかぎりにおいては、積極的な意味をもっていた(八五四頁。——この点の指摘は重要ではなからうか)。とはいふもののこのために、「価値法則の基礎のうえで人間による人間の搾取がどうして可能なのか、という問題」が、マルクスによつて気づかれないままに放置されており、まさにこの点に「労働の疎外の理論の主要な欠陥」が存在する、とヤーンは主張するのである(同上)。こうして、労働価値論の否定のうえに成立した〈疎外された労働〉の概念は、ヤーンによれば、経済学的には「偏狭すぎる」概念であり(八六五頁)、『ドイツ・イデオロギー』においてすでにマルクス自身によつてその限界がさとられ、さらに、「価値・剰余価値論」が解明されるにしたがつて「ますます背後にしりぞいてゆき、ついにはまったく放棄せられた」という評価を与えられている(八六三頁)。

3

遊部久蔵教授は、ヤーンとはすこし異なる視角から〈疎外された労働〉の概念の経済学的意義を問うて、結論としては同様の主張をおこなつておられる。すなわち教授は、この概念そのものの内容把握にかんしては多くの点でローゼンベルクと見解をおなじくしつ⁽²⁾つ、この概念がマルクス価値論の成立史上にしめる意義を検討して、「私は疎外論は止揚され放棄されるだけの経済学的実質の乏しいものであると思う」(一二頁)といわれるのである。

(1) (1) ここでとりあげるのは、同教授の論文「疎外論の経済学的意義」である。以下本文中の()内の数字は、この論文が

掲載されている『三田学会雑誌』第五二巻第一号のページを示す。なお遊部教授には、これにつづく論稿として『精神現象学』の疎外論（『三田学会雑誌』第五二巻第一二号所収）があり、なお疎外論にかんする続稿が予定されているようである。教授はマルクスの〈疎外された労働〉の概念を経済学的・哲学的・思想的に、全体として把握する意図をもっておられるものと推定される。

(2) もっとも、本文でみるように、遊部教授とローゼンベルクの見解のあいだには決定的な差異のあることも看過できない。その一つは、ローゼンベルクが〈疎外された労働〉の概念規定のうち、「人間の類からの疎外」をまったく没却しているのたいして遊部教授は、マルクスの〈歴史的方法〉の生成の根拠としてのこの規定の意義を重視しておられることであり、もう一つは、『手稿』におけるマルクスに、商品生産Ⅱその所有法則と資本制の生産Ⅱその取得法則との区別の認識があるか否か、にかんする評価のちがいである。

遊部教授の右の結論的主張をささえる根拠は、一八四〇年代のマルクスは「いまだに商品生産と資本主義的生産との関係を説明はもとより、問題意識すらしていなかつたのではなからうか」（一三頁。傍点は遊部氏）という推定であり、この推定にもとづいて、『資本論』における価値論と、「商品経済の認識をもたない」『手稿』（一四頁）とのあいだには、理論の上での飛躍Ⅱ断絶が存在すると考えられるのである。このような見地から教授は、『手稿』の「疎外論における展開をのちの『資本論』の平面にまでひきあげて理解し、こんどは逆に後者の展開の〈萌芽〉を前者のうちに見出すのは無意味である」（一三頁）と断言して、『手稿』にみられる〈物神崇拜〉 Fetichismus とか〈抽象的労働〉 *abstrakte Arbeit* なる用語に『資本論』の理論的萌芽をみいだす諸論者を批判される。教授によれば、『資本論』でいうところの〈物神崇拜〉や〈抽象的労働〉は「商品経済に固有の範疇」であり、したがって『手稿』のなかでこれらの用語がつかわれているにしても、そこにおいては「商品経済の認

識がない」以上、両者は「たんに用語が同一であるというにすぎず」、実は「明確に区別されねばならない……別のもの」なのである（一三四頁）。

遊部教授のこの所説は、いくつかの問題を提起しているものといえる。まず第一には、教授の所説の根拠をなす推定——四〇年代のマルクスは「いまだに商品生産と資本主義的生産との関係を説明はもとより、問題意識すらしていなかったのではないか」ということの正否が問われねばなるまい。ローゼンベルクはさきにもたように、『手稿』においてマルクスは「すでに、『資本論』で古典的に叙述されている『商品生産の所有法則の資本制的取得法則への転化』という理論に、まさに到達しかかっている」とのべて、遊部教授の推定とは相反するかの見解をあきらかにしているのであるが、しかしかれは右の点をただ暗示的に指摘するにとどまって、具体的に論証してはいない。したがってこの問題の解明は、マルクスの論述そのものの検討をつうじておこなうほかはない。

第二に、〈疎外された労働〉の概念の経済学的意義を問うにあたって遊部教授は、『資本論』の価値論とのみ対比して、この概念は「経済学的実質の乏しいもの」と断定しておられるのであるが、このようなやり方は一面的ではなからうか、という問題がある。この点に関連して教授自身、論文の最後に、「小論では疎外論の経済学的意義をとくに価値論についてみたのであるが、もしものちの経済学の原型ということになれば、価値論よりはむしろ剰余価値論、とくに資本蓄積論にたいしてより密接な関係がみられると思われる」（そして、この点の解明は別の機会にゆずる、と付言されている。——一六七頁）と書いておられるが、事実そうだとすれば、価値論成立史の視角からだけの研究でもって、〈疎外された労働〉の概念は「止揚され放棄される」べきものであったと断定されるのは、当を欠いたものといわねばなるまい。さらに、のちの完成した価値論・剰余価値論と外的に、対比して

『手稿』の経済学的意義を検討してみても、ここには否定的な返答しかでてこないのが当然である。もちろん、この面からの検討をつうじて〈疎外された労働〉の概念の否定的な面―限界を確認することも必要なことではある。が、われわれにとってヨリ問題なのは、未熟な段階から完成へと歩んでいったマルクスの理論的思惟の内的・動的な過程を把握することではなからうか。そしてこの過程をあとづけうるためには、まずもって〈疎外された労働〉の概念自体の内在的把握がなしとげられねばならないであろう。

なお、遊部教授は、〈疎外された労働〉の概念が『資本論』にたいしてもつ積極的な意義は、その理論的な内容にあるのではなく、この概念が方法論的な基礎を提供した点、――「経済学の方法としての歴史的方法を用意」（九頁。傍点は遊部氏）したところにあるとされるのであるが、この主張にも問題を感じないわけにはいかない。〈疎外された労働〉の概念が『資本論』にたいしてもつ方法論的意義は、たんに「歴史的方法」のみに限定されるものであろうか。それは、徹底した疎外にある労働者の主体的自覚―実践的変革の論理をもひそめているものではなからうか。そしてこの主体的自覚の論理と歴史的方法との統一においてマルクス経済学の体系が成立したのであつて、この点に〈疎外された労働〉の概念のきわめて大きい経済学的意義があるのではなからうか、とわたしは思っている。⁽¹⁾

(1) 主として経済学的視角からおこなわれた『手稿』研究には、以上に考察したものほかに、つぎの諸氏の労作がある。

杉原四郎氏「マルクス経済学の定礎」（同氏『ミルとマルクス』第二章）

松田弘三氏「労働価値論と史的唯物論の成立」（同氏『科学的経済学の成立過程』第八章）

長洲一二氏「マルクスのスミス批判」（高島善哉氏編『スミス国富論講義』第五卷所収）

以下の研究の課題と視角

以上でわたしは、『経済学・哲学手稿』の基軸としての〈疎外された労働〉の概念にかんする諸研究を概観し、いくつかの問題点を指摘してきた。

最初にもふれておいたように、〈疎外された労働〉の概念の内容をいかにとらえ、その意義をいかに評価するかということは、マルクス主義の全体的な把握ときわめて密接な関連をもっている。このことは、これまでに考察したいくつかの立場の見解からもあきらかであろう。ところで従来の『手稿』研究は、主として思想的および哲学的な視角からおこなわれ、この面ではすでにみたように、かなり高い水準で貴重な成果がうみだされている。が、〈疎外された労働〉の概念におけるマルクスの素材認識、とりわけこの概念の経済学的内容と経済学的意義にかんする研究は、いまだかならずしも満足な成果をあげるにいたっていないといえるのではなからうか。前節でみたように、経済学的視角からの研究もいくつか発表されてはいるものの、それらの多くが〈疎外された労働〉の概念の諸契機をとりあげて、それをのちのマルクスの経済学説と外的に対比するという考察方法をとっているために、いくつかの重要な問題点は摘出されておきながらも、それにはたいする確答は与えられていないように思えるのである。このことは、思想的および方法的視角からの『手稿』研究にもおのずから限界を与えていることになり、そこでの諸成果の一部を仮説の段階にとどめることにもなっているかに思われる。この点に、従

来の〈疎外された労働〉概念の研究には、ひとつの間隙が存在するとはいえないだろうか。

くりかえしていうまでもなく、〈疎外された労働〉の概念は、ドイツ古典哲学、イギリス古典経済学、（フランス）社会主義思想を批判的に媒介することによって成立したものとして、哲学的契機と科学の契機との統一において一個の世界観を体系化しているものであるはずである。とすれば、この概念の経済学的意義を問うにしても、まずもつてこの概念が内包している経済学的内容が、他の思想的・哲学的諸契機との関連において、内在的に把握される必要があるとおもわれる。ここにいう内在的把握とは、青年マルクスの思惟の展開そのものを追思惟して、この概念の内的形成過程をあとづけることによって果されうるものであろう。このような視角から、〈疎外された労働〉の概念の思想内容と経済学的意義を問う研究がおこなわれる必要があるのではなからうか。そして、このような研究をつうじてはじめて、わたしがこれまでに指摘してきた従来の諸研究の問題点にたいしても、統一的・客観的な解答を与えることができるのではなからうか。

以下のわたしの研究は、まことにささやかなものながら、右のような課題を自覚したうえでひとつの試論である。